

郷土摂津

いにしえ通信

第41号 平成13年9月1日

発行 摂津市教育委員会 生涯学習部生涯学習課

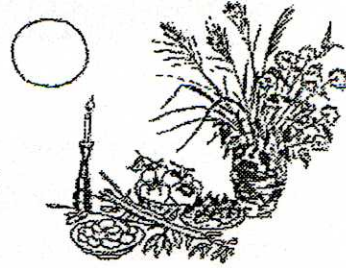
〒566-8555 摂津市三島一丁目1-1

☎(06)6383-1111 ☎(0726)38-0007

ホームページアドレス <http://www.city.settsu.osaka.jp/>

わがまち

ちょっと昔の生活



旧暦の8月15日（新暦では9月の末、今年は10月1日）の夜を十五夜・お月見というのは全国的に行きわたっています。8月15日に名月を鑑賞するのは、中国ではすでに唐の時代（618～907年）からありました。それが日本に伝わり、平安時代には宮中で観月の宴が行事化されました。しかし、月に供え物をするようになったのは室町時代以降と思われまます。十五夜の月見は秋の真中にあたるところから中秋ともいわれ、古来、観月の好時期とされ、月見が行なわれました。芭蕉の句に月を称えた句があります。

「三井寺の 門たたかばや けふのつき」

供

縁側に机などを持ち出し、ススキやオミナエシなどの秋草を瓶にさし、柿や栗などの果物とだんごを供えます。

え

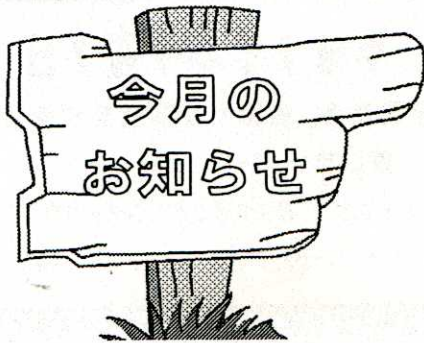
十五夜の晩には月見だんごや果物を盗みとってもいいという風習が広く分布していました。子どもたちは細長い竹竿の先に針をつけて月見だんごをとって歩いたりしました。月見だんごは盗まれるのがよいといわれており、家では喜んでとられました。またこの供え物は、おろしたあと娘に食べさせてはいけないとされる地方もあったようです。

物

摂津市では（聞き取り調査から）

お月見には、各家でお月さんの見える所にススキ、だんご、ツチ芋（ドロ芋、小芋）などを供えました。男の子は、そっと忍びよって、だんごを長い竿で突いて取るのが楽しい行事でした。だんご突きではなく「芋突き」のところもありました。

ここでは、主としてツチ芋を供えました。また、竿で突くのではなく、皿ごと持っていく子もいたようです。突くだんごは、米を石臼で粉にして、水で練って、蒸して作ったそうです。



講座や展示のご案内、活動報告など多彩な文化財情報を毎月お知らせします。

また、このページでは皆様の投稿を募集しています。

千里丘公民館講座が開催されました。

夏休み体験学習 古代人になるぞー！

8月20日に千里丘公民館で古代人の生活を体験する講座が開催されました。当日は台風が接近中であいにくの天候でしたが、11名の子ども達の参加がありました。古代の人々の大変さとすごさが体験できた一日でした。



小学3年生
Y・I画

講座の内容

古代の装い・貫頭衣をつくりました。



サヌカイトから石器をつくりました。



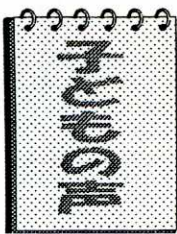
キリモミ式・ヒモギリ式・ユミギリ式の3つの方法で火おこしをしました。



石器で魚や野菜を切って、外で焼いて食べました。

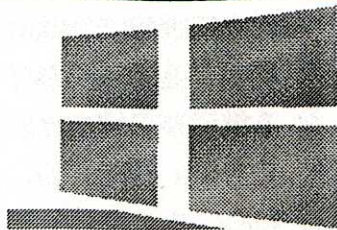


元気いっぱい！
授津の古代人になぞー



○さいしょ、ビデオをみて、ふくをつくって、それをきました。そのつぎに、サヌカイトをえらんだりしました。それにしかのつをつかいました。それからゲームをして、ひおこしをしました。それからさかなをきました。それでやいて、とうもろこしをたべて、にがいとこがあった。とってもおもしろかった。
(小学3年生 T・K)

○今日ぼくが一番楽しかった事は野菜などを切ったことです。でも魚を切ったときは気持ち悪かったです。火を起こしたときは火がでなかったの、じょうもん時代の人はずいことをしていたのだなと思いました。やいた魚やとうもろこしはおいしかったです。来年もあるんだったら行きたいです。
(小学4年生 K・S)



郷土史コーナー

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

味生(あじふ)の歴史

味経宮(あじふのみや)

大化改新は難波長柄豊碓宮を本拠として号令されましたが、この時期に、味生地区に所在したのではないかという説がある味経宮が登場します。難波長柄豊碓宮は7年かかって、言葉にいつくせないほど豪壮なものとして完成されました。しかし、その間、孝徳天皇は建設中の新宮に落ち着くことができず、子代離宮・蝦蟇行宮・小郡宮・武庫行宮・難波碓宮・味経宮・大郡宮を転々としてきました。味経宮も、かなり広大な規模のものであったと思われますが、その仮住まいの一つであったと考えられます。ところで、各宮の所在地については、諸説があって、いまだ明らかにされていません。

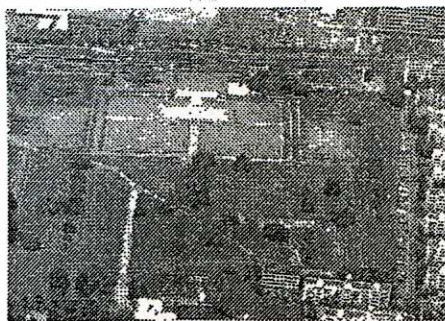
味経宮が所在した味経の地は、どの地域をさすのでしょうか？この事については、大別して2つの説に分かれています。1つは上町台地説で、もう1つが市域に属する淀川北岸説です。

味経宮についての市内における手がかりはどのようなものがあるのでしょうか。現在、市内には味生の地名はなくなりましたが、市制施行前の三島町は、味舌町・味生村・鳥飼村を昭和31年(1956)に合併したものです。かつては味生村という呼称があったのです。しかし、この味生村も、明治22年(1889)4月1日の町村制施行に際して、一津屋村・新在家村・別府村の3か村が合併したもので、その際、味生村の名は古代の「鱈生野」をもとに採用したようです。

『摂津史』に味経宮の地とされた別府および味舌地区で、旧小字名から手がかりを求めると、別府に「宮の内」と呼ばれるところがありました。淀川と神崎川の分岐点である一津屋樋門から250メートルばかりの地域です。

味経宮の所在を求めるとき、難波長柄豊碓宮との関連を無視できず、現在継続して行なわれている難波宮跡の発掘調査の成果が味経宮の位置推定にさらに新たな観点を加えることになるのではないのでしょうか。

「摂津市史」より 担当 (茗荷)



難波宮全景 「野外復元日本の歴史・新人物往来社」より

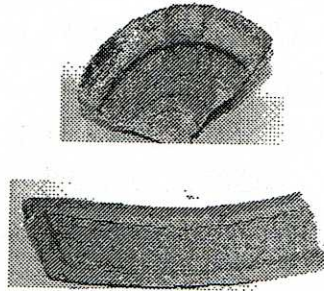
難波宮について

大阪市の中心部、中央区法円坂の一带に難波宮跡は広がっています。ここには、前後二つの時期の宮殿が重複して造営されています。昭和29年以来、今日に至るまで発掘調査が実施されており、中枢部の形態がほぼ分かってきています。そのうち前期難波宮が孝徳天皇が造営した難波長柄豊碓宮にあたると思われる。また後期難波宮は聖武天皇が即位直後に造営したものだと考えられています。

第6回

埋もれた
摂津市の歴史

発掘調査で明らかになる摂津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

平成9年度
蜂前寺跡
1次調査

←軒丸瓦
このときの発掘調査で出土した軒瓦です。軒丸瓦は巴文・軒平瓦は中心に蓮華を配し左右に唐草文を配しています。

瓦について

東西に流れる溝の中からは、比較的多くの瓦が出土しました。瓦には平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・熨斗（のし）瓦・鬼瓦などの種類があります。瓦の研究では、軒先を飾る軒丸瓦・軒平瓦が重要な位置を占めます。軒瓦の先端の装飾面を瓦当（がとう）と言います。この瓦当の文様や構造の変遷が時代によって異なり遺跡・遺構の年代決定する上での1つの指標となっています。このときの調査では、大半が平瓦でした。しかし数点の軒丸瓦・軒平瓦が出土しました。その軒丸瓦・軒平瓦については来月号で紹介し、今月号は瓦についての一般的な説明をします。

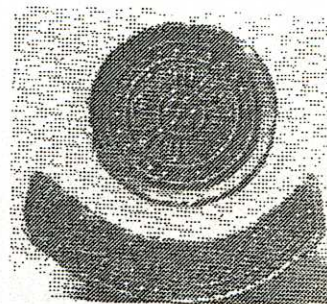
屋根をおおう瓦は中国では古く、周・秦・漢に及ぶ時代から使われていたようです。日本では飛鳥時代に仏寺の建立とともに発達し、現代に至っています。このように瓦は飛鳥時代に朝鮮半島から伝えられたもので、さきの瓦当の文様も百済系と高句麗系があります。また瓦は出土量も多く歴史時代の建物跡の発掘はもとより、窯跡からも出土し豊富な研究材料を提示しています。

軒丸瓦の瓦当文様は当初蓮華文（れんげもん）を主としていました。そして奈良時代末期には重圏文があらわれます。軒平瓦の瓦当は遅れてではじめます。はじめ重弧文（じゅうこもん）が、のちに唐草文が一般的になります。時代とともに宝塔・仏具・梵字・巴文・家紋などの文様があらわれます。

江戸時代に棧（さん）瓦が出現し、比較的小規模な建物にも瓦が葺かれるようになります。

担当 （伊部）

平城京の軒瓦



軒丸瓦は蓮華文、軒平瓦は唐草文
「平城京を揺る」吉川弘文館より